

初期近代英語期における命令法動詞とともに用いられる

二人称代名詞について

—エリザベス朝演劇を対象に—

井上瞬

京都大学大学院

liverpool.imagine@gmail.com

要旨：初期近代英語期における命令法動詞の後に二人称代名詞の *ye, you, thou, thee* が伴われるような形式について、William Shakespeare を対象とするものを始め、研究が行われてきた。しかしながら、Shakespeare のみならず、特定の劇作家の命令法動詞の後の二人称代名詞の使用について、全作品を対象とするような網羅的な調査はなされてこなかった。本稿では、エリザベス朝の Shakespeare をはじめとする四名の劇作家について、その全戯曲を対象として網羅的な調査を行い、改めて初期近代英語期における命令法動詞の後に二人称代名詞を伴う形式について考察するとともに、劇作家ごとの使用の違いについて明らかにし、文体的な特徴が見られることを指摘する。

キーワード：初期近代英語、命令法、人称代名詞、演劇

1. はじめに

本稿では初期近代英語、とりわけエリザベス朝演劇の複数の作家の全作品を対象に、命令法動詞の直後に二人称代名詞 *ye, you, thou, thee* が伴われるようなものを取り扱う。

現代英語においては、(1a) のように一般に命令法では主語が明示されないのが無標である。また、(1b) のように有標の表現として命令法動詞の前に二人称代名詞 *you* が置かれる場合がある。¹ さらに、極めて稀にはあるが、後期近代英語

¹ Jespersen (1949, III: 223) によれば、1700 年頃より命令法動詞の前に二人称代名詞が置かれる傾向が見られるようになったという。また、Visser (1970: 17) も同様に二人称代名詞を命令法動詞の前に置く形式は後期中英語に衰退したものの 17 世紀末に再び現れたとする。一方、Ukaji (1978: 96-8) は、動詞の前に主語たる

- d. 二人称単数主格代名詞 *thou* を伴う例 : <imp. + *thou*>
Speake thou Boy, (Cor F1: Sig. cc2v)
- e. 二人称単数目的格代名詞 *thee* を伴う例 : <imp. + *thee*>
Get thee away: (Lear F1: Sig. rr4v)

また、稀にはあるが、次の例のように命令法動詞とそれに伴われる二人称代名詞の間に、否定語 *not* が割り入ることがある (Cf. Millward 1966: 301; Rissanen 1999: 278)。⁴

- (3) a. **Be not you** spoke with, but by mightie suit: (R3 F1: Sig. s2r)
 b. **Feare not you** that. (Edw2 Q1: Sig. L1v)
 c. **do not you** grieue at this: (2H4 F1: Sig. gg7v)

さて、とりわけ (2b)-(2d) のような命令法動詞の後に二人称代名詞を伴うものについて、エリザベス朝演劇に関しては、主に William Shakespeare 作品を対象として、研究が複数行われてきた (Cf. Millward 1966; Quirk 1974; Busse 2002: 265ff.)。しかしながら、Shakespeare 以外の劇作家の作品については、これまで Mitchel (1971) を除いて複数の作家を対象とする研究が行われてきたとは言いがたく、Mitchel (1971) においてもそれぞれの作家の作品が網羅的に検証されているわけではない。本稿では、Shakespeare を含む四名のエリザベス朝を中心に活動した劇作家の戯曲の初期の刊本を対象としてコーパスを作成し、二人称代名詞を伴う命令法動詞についての量的な調査を行うとともに、その結果に基づいて分析を行う。その際、Shakespeare 作品と他の劇作家の作品における、命令法動詞に伴う二人称代名詞の使用を比較する。

2. 初期近代英語期の二人称代名詞について

初期近代英語期の二人称代名詞は、親称・敬称の区別がある点などにおいて現代英語とは異なる。本節では、命令法動詞に伴われる二人称代名詞について取り扱うにあたって、初期近代英語期の二人称代名詞の形態がどのようなものであったのかを概観する。まず、次の表を見られたい。

⁴ (3c)の *do* は厳密には助動詞であるが、二人称代名詞を後に伴うか否かを問わず命令法でも用いられることから、本稿で「命令法動詞」と言う場合にはこの *do* も含むこととする。

表 1 二人称代名詞の形態

	主格	所有格	目的格
親称単数	thou	thy/thine ⁵	thee
親称複数・敬称単複	ye	your	you

本来的には、この表のような使いわけがなされるようなものであったと考えられるが、⁶ 初期近代英語の実体としては異なっている。特に *you* については、中英語期の 1300 年頃に書かれた *Cursor Mundi* においてすでに主格として用いる例が見られたことが指摘されている (Visser 1944: 17)。その一方で、*ye* が中英語期より弱形の目的格として機能すること⁷ があったことが知られている (Brunner 1962: 102; Franz 1939: 255)。

- (4) a. God buy **ye**. (= ‘God be with you’ [> PE *goodbye*.]; Ham F1: Sig. Oo4v)
 b. do as I command **ye**: (2H6 F1: Sig. o1r)

さらに *you* は初期近代英語期の 16 世紀半頃より主格としての使用が主流となっていた (Franz 1939: 255)。そのため、例えば Hope (2003: 72) は、*thou* を主格、*thee* を対格 (目的格) としてそれぞれ挙げているが、*you/ye* については主格と対格の両方に挙げている。本稿では、*thou/thee* についてはそれぞれ主格と目的格として区別するが、*ye/you* については *ye* を基本的に主格とみなすものの、*you* に関しては、現代英語においてと同様、共通格 (common case) であったと見做す。

⁵ *thine* や *mine* は所有代名詞であるのみならず、後続する語が母音ないしは /h/ の音で始まる場合に用いられることのある所有格でもあった。また、*thy/my* は、後続する語が、母音や /h/ を含め、いかなる音で始まるものであっても用いられる所有格であった (Cf. Abbott 1870, §237)。なお、Mitchel (1971: 82-3) は、調査の結果対象としたテキストにおいて、母音の前では *thy* が 343 例であるのに対して *thine* が 129 例、/h/ の前では *thy* が 299 例であるのに対して *thine* が 4 例あったことを報告している。

⁶ *thou, ye* は古英語期の主格形に、*thee, you* は古英語期の与格形・対格形に由来する (Cf. von Mengden 2017: 89; Brunner 1967: 62)。

⁷ なお、Shakespeare 作品において *ye* が目的格として使用される例については、Franz (1939: 256) を参照。

3. 先行研究

本節では、命令法の後に二人称代名詞を伴うような形式についての先行研究を概観することとする。

3.1. Abbott (1870)

Abbott (1870: 141-2) は、「*thou* の代わりに *thee* (Thee for thou)」なる節において、命令法で *thou* の代わりに *thee* を後に伴う移動動詞は「再帰動詞 (reflexive)」と呼ばれるものである⁸ とするものの、*look thee* や *hark thee* のような場合については、命令法動詞が強意的であるために後続の代名詞は非強意的である必要があるというような、音調上の理由 (euphonic reasons) がある可能性を主張している。一方、*you* の場合については特に言及していない。

3.2. Poutsma (1926)

Poutsma (1926: 201) は、古い段階の英語における命令法動詞の後の人称代名詞の付加について、強調が意図されたものではなく、むしろ横柄さを和らげるためになされたものであると述べている。

3.3. Franz (1939)

Franz (1939: 249) は、*retire thee* のような再帰動詞の命令法に伴われる *thee* によって、*hear*, *run* のようなその他の動詞の命令法においても、本来 *thou* を使用するところが、*thee* を使用することが確立することに貢献したとする。その上で、*we*, *ye* のような命令法動詞の後に置かれる得る複数形人称代名詞が、音声的反響により (durch den lautlichen Anklang)、*thee* の使用の拡大を促進したとする。

3.4. Jespersen (1949)

Jespersen (1949, III: 222) は、主に感情的色彩を帯びさせるために主語が命令法動詞に付されるとし、*thou*, *ye*, *you* が古い段階の言語では動詞の後に置かれたことを指摘している。Jespersen (1949, VII: 258-61) は、斜格について再帰代名詞として用いられているものとし、その上で再帰代名詞の付与が不適切な動詞についても斜格が使用されるとしている。さらに Jespersen (1949, VII: 261) は、*awake* の

⁸ 他にも Zachrisson (1919: 25-6) が、人称代名詞はしばしば再帰的意味 (reflexive betydelse) を持つとし、命令法の例として Shakespeare から <get you/thee to ...> という形式のものを挙げているが、この *get* は *to* 以下が場所句であることから移動動詞の一種として考えられる (Cf. Yamakawa 1966: 18)。

ような自動詞とも他動詞とも解釈される動詞の例を挙げて、<imp. + *thee*>という形式について、動詞を自動詞と解釈して、*thee*を*thou*の代わりに用いられた主語と解釈することも、再帰代名詞と解釈することも、あるいは動詞を他動詞と解釈して*thee*を目的語と解釈することもできると指摘し、その上でいずれも意味に差異はないと主張している。

3.5. Millward (1966)

Millward (1966) は Shakespeare 作品、とりわけ First Folio に収録された 35 作品を対象に調査を行っている。Millward (1966, 301) は、(1c)-(1d) のような二人称代名詞が伴われる形式 (<imp. + *you/thou*>) は、方言話者や外国人の発話を示唆するときに Shakespeare によって用いられていると述べている。

Millward (1966: 301-2) の調査結果は、次の表のようにまとめられる。

表 2 Shakespeare の<imp. + *you/ye/thou/thee*>の用例⁹ (Cf. Millward 1966: 301-2)

	用例数	動詞の種類	共通するもの
<i>ye</i>	35	13	10
<i>you</i>	>500	92	
<i>thou</i>	>200	77	17
<i>thee</i>	>200	56	

このうち、主格と目的格で共通して用いられている動詞について、*ye*と*you*の場合は7種類、*thou*と*thee*の場合は17種類あったとしている。

この調査に基づき、次のような主張を Millward (1966: 301-4) は行っている。まず、*ye*は少なくとも命令法では*you*の「弱形 (a reduced form)」であって、*you*は主格かつ斜格であると見られるが、どうやら*thou*は命令法動詞にわずかに強勢を与えるために使われていると述べている。また、*thou*と共に命令法で用いられる動詞は、①運動動詞、②注意を引くための動詞 (verbs of attention)、③再帰目的語ないしは間接目的語を取る動詞、に大別できるとしている。さらに、①運動動詞に関して、ほとんどが古英語・中英語期に与格を取っていたこと、動詞 *fare* は<*fare* + 2nd pers. pron. + *well*>という挨拶表現でのみ用いられたこと、②注意を引くための動詞に関して、*hark, hear, look, mark*のみが用いられていたが、現在用いられ

⁹ 備考の丸括弧内に示された数字は、示されている用例数を表す。また、<は「より多い」、>は「より少ない」をそれぞれ意味する。

る *mind you* は用いられていないものの *you* が多く伴われ、*-self* 形は用いられていなかったこと、③再帰・間接目的語を取る動詞に関しては、①・②が閉じたクラスであるのに対して開いたクラスであって、唯一の制約は他動性と適合することであること、といったことが述べられている。③に関して Millward (1966: 306) は、*break, come, sit, stand* については、明白な説明を行うことはできないが、Voges (1887) を援用した上でこれらは古期の英語で再帰与格を取っていたためにこの区分に分類されるものであるとしている。

3.6. Yamakawa (1966)

Yamakawa (1966) では、命令法動詞に二人称代名詞が伴われるものが通時的に取り扱われている。とりわけ、初期近代英語期の二人称代名詞が命令法動詞の後に置かれるものについては、‘The VS Type’ と ‘“Impertive+Reflexive Dative” Chiefly in Shakespeare’ という節において扱われている。

Yamakawa (1966: 10) は、命令法動詞の後に二人称代名詞が現れる形式について、近代英語では古英語・中英語に比べ非常に衰退していると指摘している。加えて Yamakawa (1966: 11) は、現代の口語ではこのような形式は古風な表現ないしは廃用となっており、命令法動詞の前に二人称主語が現れる形式に取って代わられていると述べている。

Yamakawa (1966: 14) は、*mind you* における *you* は再帰的な与格として歴史的には解釈されるべきであるとしている。また、命令法で再帰的な与格を伴う動詞を次の5種類に分類している。

- (a) 運動動詞 (verbs of motion)
- (b) 状態動詞 (verbs of state or posture)
- (c) 感情動詞 (verbs of emotion)
- (d) 注意を引くための動詞 (verbs of attention)
- (e) その他の動詞 (verbs of other kinds)

その上で、こうした再帰的な与格が付される動詞は、印欧語の中動態に対応する分析的表現に由来するとしている。このような再帰的与格の付与は、動詞によって意味される動作・状態に対する個人の関心の心理的要素を増大させるような成果をしばしば上げるものであるとしている。また、時に継続的のAspectや中立的のAspect (neutral aspect) を表す動詞に、起動的Aspectの力を与える助けをすることのあるものであって、命令や依頼に生き生きとした調子を提供するも

のであると主張している。その上で、<imp. + ye/you/thou/thee>という形式で二人称動詞が実際に果たしたような機能を果たすのに、再帰的与格の *you/thee* の付与の方がより自然で適切なものであらうと述べている。

Yamakawa (1966: 17) は、命令法動詞の後に主格の人称代名詞が伴われる形式と、再帰的与格の人称代名詞が伴われる形式が、エリザベス朝の英語では混ざり合い、前者に後者が無視できないような影響を与えたとしている。あるいは Yamakawa (1966: 18) は、複数の成立年代の異なる聖書の英訳の比較から、*go* を用いた表現から *get* に与格を伴う表現への移行が見られるとし、後者が Shakespeare では一種の慣用表現となっていたと述べている。また Yamakawa (1966: 8) は、*you* は強勢のある位置で用いられ、*ye* は強勢のない、あるいは、前接的な位置で用いられるとしている一方で、Yamakawa (1966: 18) は、Shakespeare の時代にはまだ *thou/thee* の格の区別が依然としてかなりあったとしている。

3.7. Schmidt (1970)

Schmidt (1970, II: 1214)は、命令法の後に *thou* が現れるものについて、「余剰 (redundant)」であると断言している。また命令法に限らず、他動詞の *get* などの後に *thee* が現れているようなものについては「利益の与格 (dativus commodi)」であるとしている。その一方で、命令法について *bare*, *prepare*, *hide* などの動詞の場合について *thee* は再帰的な代名詞であるとし、*look*, *hark*, *hear*, *come* などの動詞の場合について *thee* は *thou* の代わりに用いられているものとしている。しかし、この *thee* が再帰的なものか、主格の *thou* の代わりであるか、ということについての基準を明示してはいない。また、Schmidt (1970, II: 1408) は、強勢のある場合に限らず、命令法動詞の後で *you* が余分 (superfluous) でありながら用いられるとしている。

3.8. Mitchel (1971)

Mitchel (1971)は、1580年から1780年までの戯曲全62作品を対象として、コーパス調査に基づく通時的な研究を行っている。対象とされた作品のうち、本研究において対象とする劇作家について言えば、Marloweが2作品、Shakespeareが10作品、Jonsonが2作品である¹⁰ のに加えて、Greeneについては一切取り扱われて

¹⁰ なお、Mitchel (1971)においては、Marlowe 作品の中で *DrF.* と *JM* が、Shakespeare の中で *Ham.*, *JC*, *Lear*, *1H4*, *1H6*, *H5*, *Temp.*, *R2*, *R3*, *TN* が、Jonson 作品の中で *EMI* と *Volp.* が、それぞれ取り扱われている。

いない。¹¹ さらに、対象とされた戯曲が全 62 作品ある中で、Shakespeare 作品が 10 作品あり、全体のおよそ 16% を占めている。他の作家の作品については、いずれの作家も 1 作品ないしは 2 作品しか収録されていない。その上、対象とされた Shakespeare 作品について言えば、10 作品中 5 作品が歴史劇である¹² など、部分的な取り扱いとなっている。

Mitchel (1971: 90) は、Shakespeare における二人称代名詞を伴う命令法動詞については Millward (1966) で取り扱われていることから対象外としている。この Mitchel (1971: 91-2) の調査結果は次の表のようにまとめられる。

表 3 Mitchel (1971) による <imp. + ye/you/thou/thee> の調査結果

	用例数	動詞の種類	共通の動詞	備考
<i>ye</i>	142	8	7	
<i>you</i>	225	6		<i>look, hark</i> (>60), 他の動詞 (<3)
<i>thou</i>	35	16	0	<i>be</i> (10), <i>go</i> (4)
<i>thee</i>	30	16		<i>get</i> (5), <i>hark</i> (4)

また、Mitchel (1971: 92-3) は、命令法動詞に二人称代名詞が伴われるようなものについての時代ごとの変遷について触れており、その概略は次の表のようにまとめられる。

表 4 二人称代名詞を伴う命令法動詞とその変遷

	第 1 期 (1580-1630)	第 2 期 (1630-1680)	第 3 期 (1680-1730)	第 4 期 (1730-1780)
<i>ye</i>	9	5	72	56
<i>you</i>	42	62	95	26
<i>thou</i>	19	7	5	4
<i>thee</i>	3	15	12	0
合計	73	89	184	86

¹¹ ちなみに、Shakespeare と同時代の作家の作品として、Mitchel (1971) は他に John Ford の *The Broken Heart* と *Perkin Warbeck* も対象としている。

¹² Shakespeare の戯曲のジャンルに関して、F1 の分類では、喜劇が 14 作品、歴史劇が 10 作品、悲劇が 12 作品である。

動詞 の 種類	32 <i>go, get</i> (9), <i>look</i> (8), <i>be</i> (6), <i>take, stand</i> (4), <i>hark, hear</i> (3)	23 <i>get</i> (11), <i>hark,</i> <i>look</i> (10), <i>fare</i> (4), <i>be, let</i> (3)	21 <i>look</i> (89), <i>hark</i> (52), <i>get</i> (6), <i>be</i> (4), <i>hold</i> (3)	9 <i>hark</i> (41), <i>look</i> (32), <i>get</i> (6)
---------------	--	---	--	--

Mitchel (1971: 94) は、18 世紀における *ye* の使用の増大は *hark ye, look ye* の使用によるものであると述べ、第 4 期までに現代的な命令法動詞単独の形式へと変わりつつあったと指摘している。あるいは、例えば *get you a chair* における *you* は主語のようであるが、おそらく再帰的に用いられているものと見做している。

3.9. Quirk (1974)

Quirk (1974: 52) は、Shakespeare の言語を取り扱った論文において、(1a), (1d), (1e)に挙げたような形式 (すなわち、<imp.>, <imp. + thou>, <imp. + thee>) について、当時常に注意深く意味の上で区別されていたと実態を無視して主張するのは無駄であろうが、かといって常に同義的であったとみなしてはならないと述べている。加えて Quirk (1974: 52-3) は、*thou* が付与された<Imp. + thou>という形式は、付与されていない<Imp.>という形式よりも強意的であるが、*thee* が付与された<Imp. + thee>という形式は、*thee* がどちらかという弱形であることから、呼びかけられている個人を関わらせようとしているものであると主張している。

3.10. Ando (1976)

Ando (1976: 258-9) は、命令法動詞の後に伴われる *thou/you* を主語として解釈している一方で、Ando (1976: 264-7) は命令法動詞の後に伴われる *thee/ye* を基本的に与格ないしは受益者格 (benefactive) と解釈している。

3.11. Ukaji (1978)

Ukaji (1978) では、複数の作家の初期近代の文学作品が対象とされており、本稿で対象とする作家の作品に限れば、Marlowe と Shakespeare の全作品 (TNK, Edw3 除く) と Jonson の *EMI, Volp., Barth.* が対象とされている。Ukaji (1978: 102) は、命令法では助動詞 *do* の後で二人称代名詞が必須となると述べている。また、Ukaji (1978: 103-4) 運動動詞や姿勢動詞、注意を引くための動詞は再帰代名詞として単純形 (すなわち通常の目的格) が義務的になると指摘している。Ukaji (1978: 105) は再帰的与格目的語には単純形が通常用いられるとしている。加えて、Ukaji

(1978: 106-7) は、*thou, you/ye* が主語として命令法動詞のあとで用いられている場合や前置詞の後に置かれる場合は、再帰目的語は複合形 (すなわち *-self* 形) が義務的となり、複合形のみが再帰代名詞では命令法動詞の前に現れ得ることを指摘している。

3.12. Nevalainen and Raumolin-Brunberg (1996)

Nevalainen and Raumolin-Brunberg (1996: 312) は、‘I pray you[,] do something’ と ‘I pray [that] ye do something’¹³ のような例を挙げて、*ye* の代わりに本来目的格の *you* が主格として用いられるような変化にとって、自然な位置 (natural loci) であるような曖昧な統語的環境があると指摘している。

4. 調査対象

本節では、本稿において用いるコーパスについて説明を行う。本コーパスは、次の四人のエリザベス朝で主に活動した劇作家¹⁴ の全戯曲の初期近代当時出版された刊本¹⁵ のうち、初期のものを対象として収集したものを構成されている。

- Robert Greene (1558–1592)
- Christopher Marlowe (1564-1593)
- William Shakespeare (1564-1616)
- Ben Jonson (1572?-1637)

16 世紀末から 17 世紀前半¹⁶にかけての、これら四名の戯曲の刊本の刊行状況は

¹³ 角括弧内は共に本稿筆者による補足である。

¹⁴ 劇作家の生没年の情報は、Bowers (1987) に拠った。四人の劇作家は、出生年順に並べてある。なお、Marlowe と Shakespeare に関しては、出生年自体は同じであるが、前者は 2 月に、後者は 4 月にそれぞれ生まれたとされ、前者の方が劇作家としての活動の開始時期が後者よりも早いため、この順とした。

¹⁵ したがって、一般的に *Sir Thomas More* は部分的に Shakespeare の手によるとされるが、当時のテキストが手稿しか残っていないため、本稿のコーパスの対象とはしない。なお、戯曲の作者が誰であるのかということ (authorship) については多くの問題を抱え、いくつかの作品は共作とみなされるほか、作品によっては interpolation が疑われるような箇所 (Cf. Chambers 1930: 472) も含まれるが、今日の各作家の作品として扱われるものを、その劇作家の戯曲として基本的に扱う。

¹⁶ Shakespeare については F1 の出版が 1623 年、Jonson については F1 の出版が 1616 年、F2 の出版が 1640 年であることから、現代の刊本の編集の際に特に依拠される刊本は、概ね 17 世紀の前半には皆出版されていると言える。

次の表のようにまとめることができる。¹⁷

表 5 四名の戯曲と初期の刊本

劇作家	作品名略称 (刊本)
Robert Greene	<i>Alph.</i> (Q1), <i>FBFB</i> (Q1-3), <i>GaG</i> (Q1), <i>Jam4</i> (Q1), <i>LGLE</i> (Q1-5), <i>OF</i> (Q1, Q2), <i>Sel.</i> (Q1, Q2)
Christopher Marlowe	<i>DrF.</i> (A1-3, B1-6), <i>Edw2</i> (Q1-4), <i>JM</i> (Q1), <i>MP</i> (Q1), <i>1Tamb. & 2Tamb.</i> (O1-4)
William Shakespeare	<i>Ado</i> (F1, Q1), <i>Ant.</i> (F1), <i>AWW</i> (F1), <i>AYL</i> (F1), <i>Cor.</i> (F1), <i>Cym.</i> (F1), <i>Edw3</i> (Q1, Q2), <i>Err.</i> (F1), <i>1H4</i> (F1, Q1-9), ¹⁸ <i>2H4</i> (F1, Q1), <i>H5</i> (F1, Q1-3), <i>1H6</i> (F1), <i>2H6</i> (F1, Q1-3), <i>3H6</i> (F1, O1, Q2, Q3), <i>H8</i> (F1), <i>Ham.</i> (F1, Q1-9), <i>JC</i> (F1, Q1-6), <i>John</i> (F1), <i>Lear</i> (F1, Q1-3), <i>LLL</i> (F1, Q1, Q2), <i>Mac.</i> (F1, Q1), <i>MM</i> (F1), <i>MND</i> (F1, Q1, Q2), <i>MV</i> (F1, Q1-3), <i>Oth.</i> (F1, Q1-6), <i>Per.</i> (Q1-5, O6), <i>R2</i> (F1, Q1-6), <i>R3</i> (F1, Q1-8), <i>Rom.</i> (F1, Q1-5), <i>Shr.</i> (F1, Q1) ¹⁹ , <i>Temp.</i> (F1), <i>TGV</i> (F1), <i>Tim.</i> (F1), <i>Tit.</i> (F1, Q1-3), <i>TN</i> (F1), <i>TNK</i> (Q1, Beaumont & Fletcher's F1), <i>Tro.</i> (F1, Q1), <i>Wiv.</i> (F1, Q1-3), <i>WT</i> (F1)

¹⁷ Cf. Greg (1962a), Greg (1962b). なお、どの劇作家の作品集あるいは個別の作品の刊本についても、それがどの判型であっても、判型の頭文字と刊行順によって、例えば F1 (=First Folio) のように一般に示され、本稿でもそれに従う。さらに、Marlowe の *DrF.* については、複数の系統の刊本 (いわゆる A Text, B Text) が存在し、いずれも Quarto で出版されているが、慣行に従って例えば A1 (= the First Quarto of A Text) のように示す。また、Folios については、Shakespeare は F1 のみ、Jonson は F1 と F2 のみ、作品が掲載されている場合で記す。Shakespeare については F1 に掲載された作品が F2-4 にも、Jonson については F1, F2 に掲載された作品が F3 にも、それぞれ掲載がされているためである。

¹⁸ Q1: 'An edition known from one sheet only.' (Greg 1962a: 238)

¹⁹ *The Taming of a Shrew* (以下、*A Shrew*) については、Shakespeare の *The Taming of the Shrew* (*Shr.*) との関係について諸説ある。*A Shrew* が *Shr.* の材源 (resource) であるとする説、*A Shrew* は *Shr.* の海賊版 (つまり 'bad quarto') であるとする説、*A Shrew* と *Shr.* には共通の材源たる作品 *Ur-Shrew* があるとする説が主なものである (Cf. Muir 1977, 19)。しかし、いずれも今日において支配的な説であるとは言い難いようである。また、Greg (1962a: 203-5) は同じ項目で *A Shrew* と *Shr.* を取り扱っているが、本稿筆者は *Shr.* と *A Shrew* は別個のものとする。

Ben Jonson	<i>Alch.</i> (F1, Q1), <i>Fair</i> (F2), <i>Case</i> (Q1), <i>Cat.</i> (F1, Q1-5), <i>CR</i> (F1, Q1), <i>DA</i> (F2), <i>EH</i> (Q1-3), <i>EMI</i> (F1, Q1), <i>EMO</i> (F1, Q1-3), <i>Epic.</i> (F1, Q1), <i>Inn</i> (Q1), <i>ML</i> (F2), <i>Mort.</i> (F2), <i>Poet.</i> (F1, Q1), <i>Sej.</i> (F1, Q1), <i>Shep.</i> (F2), <i>SN</i> (F2), <i>Tub</i> (F2), <i>Volp.</i> (F1, Q1)
------------	--

本コーパスの収録基準は次に述べる通りである。Shakespeare ないしは Jonson の作品に関しては、初期の Folio に収録されている作品はそこから、それ以外は最初期の Quarto あるいは Octavo から、それぞれ戯曲のテキストを収録する。また、Marlowe の *DrF.*については、B Text の最初期の Quarto を収録することとする。すなわち次に挙げるものが本コーパスの収録対象である。

表6 コーパスの収録対象

劇作家	作品名略称 (刊本)
Robert Greene	<i>Alph.</i> (Q1), <i>FBFB</i> (Q1), <i>GaG</i> (Q1), <i>Jam4</i> (Q1), <i>LGLE</i> (Q1), <i>OF</i> (Q1), <i>Sel.</i> (Q1)
Christopher Marlowe	<i>DrF.</i> (B1), <i>Edw2</i> (Q1), <i>JM</i> (Q1), <i>MP</i> (Q1), <i>1Tamb.</i> & <i>2Tamb.</i> (O1)
William Shakespeare	<i>Ado</i> (F1), <i>Ant.</i> (F1), <i>AWW</i> (F1), <i>AYL</i> (F1), <i>Cor.</i> (F1), <i>Cym.</i> (F1), <i>Edw3</i> (Q1), <i>Err.</i> (F1), <i>1H4</i> (F1), <i>2H4</i> (F1), <i>H5</i> (F1), <i>1H6</i> (F1), <i>2H6</i> (F1), <i>3H6</i> (F1), <i>H8</i> (F1), <i>Ham.</i> (F1), <i>JC</i> (F1), <i>John</i> (F1), <i>Lear</i> (F1), <i>LLL</i> (F1), <i>Mac.</i> (F1), <i>MM</i> (F1), <i>MND</i> (F1), <i>MV</i> (F1), <i>Oth.</i> (F1), <i>Per.</i> (Q1), <i>R2</i> (F1), <i>R3</i> (F1), <i>Rom.</i> (F1), <i>Shr.</i> (F1), <i>Temp.</i> (F1), <i>TGV</i> (F1), <i>Tim.</i> (F1), <i>Tit.</i> (F1), <i>TN</i> (F1), <i>TNK</i> (Q1), <i>Tro.</i> (F1), <i>Wiv.</i> (F1), <i>WT</i> (F1)
Ben Jonson	<i>Alch.</i> (F1), <i>Fair</i> (F2), <i>Case</i> (Q1), <i>Cat.</i> (F1), <i>CR</i> (F1), <i>DA</i> (F2), <i>EH</i> (Q1), <i>EMI</i> (F1), <i>EMO</i> (F1), <i>Epic.</i> (F1), <i>Inn</i> (Q1), <i>ML</i> (F2), <i>Mort.</i> (F2), <i>Poet.</i> (F1), <i>Sej.</i> (F1), <i>Shep.</i> (F2), <i>SN</i> (F2), <i>Tub</i> (F2), <i>Volp.</i> (F1)

5. 調査

本研究の調査は、前述した独自に構築したコーパスを対象に、コンコーダンスであるコンピュータ・ソフトウェア Antconc (Anthony 2020)を用いて、二人称代名

詞 *thou, ye, thee, you* が用いられている箇所全てを抽出し、その上で命令法動詞の後に二人称代名詞が伴われている用例を選り分ける形で行った。この際、次の基準に基づいて作業を行った。

- 二人称代名詞の直後に同格の名詞句が現れている場合も、命令法動詞の後に二人称代名詞が伴われているものとして判断した。²⁰
- 主語と動詞の倒置による疑問文ないしは接続詞 *if* などの省略と考えられるような場合 (Cf. Barber 1997: 192) は除外した。
- それ以前に明示されている、主語である語 (句) の省略があると考えられるような場合は除外した。
- 次に挙げるものは、二人称代名詞の前に置かれている語が命令法動詞でないために、除外した。
 - ✧ *peace you* : *peace* は ‘reproach, impatience’ (Crystal and Crystal 2002: 159) を表す間投詞
 - ✧ *save you/thee, bless you, give you good morrow/night, give you/thee joy, quit you, rest you merry* : 主語 *God* が省略されている
 - ✧ *pray you/thee*²¹, *beseech you, charge you, cry you mercy, warrant thee* : それぞれ主語 *I* が省略されている
 - ✧ *please you/thee*²² : (*may*) *it* が省略されている
 - ✧ *Adj. be you/thou* : *be* は仮定法現在であると判断²³
 - ✧ *soft ye/you* : *soft* は副詞で *go soft* の短縮²⁴
- 命令法動詞の後に二人称代名詞とその同格の名詞 (句) が現れるような場合、命令法動詞に二人称代名詞が伴われているものとして扱う²⁵

²⁰ 二人称代名詞とその同格の名詞句からなるものを、主語ではなく呼びかけの表現として現代の刊本で解釈されていることが多いが、当時の刊本の表記を見る限り、いずれであるかを客観的に判別することは困難であるためである。

²¹ *pray thee* は *prithe* のような形を取ることもある。

²² ‘Without *it* as subject. Formerly esp. in *please you, so please you*: may *it* (so) be agreeable to you (now archaic).’ (OED, *please*, v. 3b. (b)) Cf. Schmidt (1971, 2:873).

²³ Cf. Rissanen (1999: 229). なお、<*be* + 2nd pers. pron. + Adj.>という語順の場合、この *be* を命令法動詞であると判断するが、意味の上では事実上両者に大きな差があるとは言えない。

²⁴ Cf. Onions (1988: 256).

²⁵ 次のように現代の刊本において、(iia) のように二人称代名詞とその同格の名詞を共に挿入句と判断することもあれば、(iib) のように同格の名詞のみを挿入句と判断することもある。

- 二人称代名詞が命令法動詞の後に現れる名詞句中で前置詞の後に用いられるような例については、数に含めない²⁶

その上で本調査において収集された用例の代名詞ごとの概略は次の通りである。

表7 代名詞の形態ごとの二人称代名詞を伴う命令法の使用状況

	用例数	動詞の種類
thou	333	96
ye	68	35
thee	256	70
you	636	95

この表からわかることとしては、まず、用例数の平均が約325であることや、*thou*と*thee*の用例数が300前後であるのに比べて、用例数が70弱であるなど*ye*の使用自体が非常に少なく、その一方で用例数が636であるなど*you*の使用が極めて多いことである。これは2節において触れたように、*you*が目的格のみならず主格としてもまた用いられるようになっていたことや、主格で*ye*を使用すること自体が減少していったことに起因するものと見てまず間違いのないであろう。また、十分な用例数のある*you*と*thou/thee*の場合を比較すると、用例数あたりの使用されている動詞の種類が、*you*の場合について*thou/thee*の場合に比べおよそ半数である。従って、命令法動詞に*you*を伴う形式については、特定の動詞が多くの用例で用いられていると考えられる。

-
- (ii) a. Go, **you wild bedfellow**,
b. Aroynt **thee, witch**,

(Proudfoot et al. 2021: *Ant.* I.ii.50)
(Proudfoot et al. 2021: *Mac.* I.iii.6)

Proudfoot et al. (2021) においては、*thou, ye, you* に関して前者のように判断され、*thee* に関して後者のように判断されているが、*thee* のみならず *you* についても目的格としても用いられることから、この判断は恣意的である。そのため本稿では画一的に、全て (iib) のように判断することとした。

²⁶ 例えば、次のような例がこれに当たる。

- (iii) Go, some of you,

(Proudfoot et al. 2021: *R2* IV.i.268)

6. 分析

ここからは、使用されている動詞について詳しく見る。それぞれの形態について、次の諸表を見られたい。²⁷

表 8 *thou* を伴う動詞の種類と用例数

動詞	用例数	百分率
be	66	19.82%
take	34	10.21%
go	23	6.91%
come	14	4.20%
do (aux.)	13	3.90%
see	12	3.60%
know	8	2.40%
lie	8	2.40%
look	8	2.40%
stay	8	2.40%
farewell	7	10.61%
speak	7	2.10%
do	5	1.50%
live	5	1.50%
make	4	1.20%
say	4	1.20%
sleep	4	1.20%
stand	4	1.20%
tell	4	1.20%
その他	95	28.53%
合計	333	

表 9 *ye* を伴う動詞の種類と用例数

動詞	用例数	百分率
fare	11	16.18%
hark	7	10.29%
repent ²⁸	7	10.29%
be	3	4.41%
look	4	5.88%
get	4	5.88%
go	2	2.94%
hear	2	2.94%
help	2	2.94%
take	2	2.94%
その他	24	35.29%
合計	68	

²⁷ 1%未満 (*ye* の場合のみ 1 例) のみ使用された動詞は「その他」とした。また、‘do (aux.)’は助動詞を指す。なお、*lookee*, *harkee* のようなものは見当たらなかった。OED によれば *lookee* の類の初出は 1663 年である (v., 1. a.)。

²⁸ 7 例とも *LGLE* (Q1: Sig. G4r, H2v-H3r) で *Ionas* により用いられ、全て ‘Repent ye men of Niniue [= Nineveh], repent.’ となっている。

表 10 *thee* を伴う動詞の種類と用例数

動詞	用例数	百分率
get	79	30.86%
fare	34	13.28%
hie	28	10.94%
hold	10	3.91%
content	9	3.52%
hark	7	2.73%
look	7	2.73%
bethink	4	1.56%
hang	4	1.56%
take	4	1.56%
hide	3	1.17%
make	3	1.17%
sit	3	1.17%
その他	61	23.83%
合計	256	

表 11 *you* を伴う動詞の種類と用例数

動詞	用例数	百分率
look	106	16.67%
get	81	12.74%
be	45	7.08%
go	44	6.92%
hark	40	6.29%
fare	32	5.03%
hear	30	4.72%
do (aux.)	25	3.93%
come	20	3.14%
stand	17	2.67%
take	13	2.04%
fear	12	1.89%
say	10	1.57%
bethink	8	1.26%
sit	8	1.26%
make	7	1.10%
rest	7	1.10%
speak	7	1.10%
その他	124	19.50%
合計	636	

これらの動詞について、次の表に示すような分類を行う。

表 12 動詞の分類の詳細

(α) 運動動詞 ²⁹	approach, aroint, avaunt, avoid, clamber, come, enter, fare ³⁰ / farewell, fly, follow, go, guide, haste, hie, lead, leave, march, move, pace, proceed, repair, retire, return, ride, run, soar, speed, walk
(β) 注意を引く動詞	hark, hear, look, mark
(γ) 他動詞 (再帰的目的語を取り得る動詞)	<u>absent</u> , <u>advise</u> , answer, <u>appear</u> , arm, <u>assure</u> , attend, awake, bate, <u>bear</u> , beat, believe, beshrew, bestir, <u>betake</u> , <u>bethink</u> , beware, bind, <u>boast</u> , boil, <u>bow</u> , break, bring, buy, call, calm, cast, charge, <u>cheer</u> , choose, claim, <u>content</u> , conceal, confess, cost, cover, cry, deal, <u>defend</u> , deliver, dismantle, dispatch, do, <u>doubt</u> , draw, drink, drive, dub, <u>fear</u> , feed, fetch, find, fit, get, girt, give, greet, guess, hang, haunt, have, <u>help</u> , hide, hold, judge, keep, know, lay, learn lend, make, meet, mount, mourn, multiply, open, pack, pall, perceive, plant, pray, <u>prepare</u> , <u>prove</u> , provide, purge, put, quit, ram, read, recant, receive, repose, resolve, rest, save, secure, see, seek, seize, send, set, shake, shed, shield, show, silence, <u>sit</u> , soothe, speak, stay, steal, strike, sway, take, taste, teach, tell, think, threaten, <u>turn</u> , <u>unarm</u> , understand, <u>use</u> , yield, wait, warm, wash, wear, ween, weigh, wipe, work, write
(δ) その他の自動詞	avert, be, blow, crouch, do, eat, ensconce, kneel, lie, live, rail, recant, remain, repent, say, scout, sleep, stand, stint, strive, tarry, tremble, watch, weep, whine
(ε) その他	do (aux.)

上記の動詞の分類に基き、各二人称代名詞が伴われる命令法動詞について整理すると、次の表のようになる。

²⁹ Cf. Levin (1993: 263-70).

³⁰ fare は命令法で二人称代名詞を伴う場合、常に副詞 well が共起していた。また、fare ye/thee well については、1語かのように綴られる例がごく少数ながら見られた。

表 13 二人称代名詞とそれを伴う命令法動詞の分類

	thou		ye		thee		you	
(α)	58	17.42%	19	28.36%	144	56.47%	191	30.03%
(β)	13	3.90%	13	19.40%	14	5.49%	182	28.62%
(γ)	150	45.05%	21	31.34%	95	37.25%	159	25.00%
(δ)	99	29.73%	13	19.40%	2	0.78%	78	12.26%
(ϵ)	13	3.90%	1	1.49%	0	0.00%	26	4.09%

この表から言えることとしては、*thou/thee* を伴う場合、(β) が少ないことがまず挙げられよう。また、*thee* を伴う場合について、(δ) の使用が他の二人称代名詞よりも少なく、その内訳は *stand* が 2 例である。*stand* については、Voges (1883: 337) によれば古英語・中英語期に再帰的与格と共に用いられていた動詞であることから、(γ) に含め得るものと考えられる。したがって、*thee* を命令法でその後ろに伴い得る動詞は (α), (β), (γ) のいずれかの分類に区分され得るものであると言える。また、(α) に含まれるような運動動詞の多くについては古英語期などで再帰的与格を取っていた³¹ ことから、(γ) と同一視することができると考えられる。なお (β) については、古英語に与格ないしは対格、中英語期以降に目的格を取る動詞ではないために、(α), (γ) とは状況が異なる。例えば *hark thee* について、*OED* は *hark ye* との「混同によって ('by confusion')」使用されたとしている (*hark*, v., 2. c)。³² *OED* は他の動詞の場合については特に記述を行ってはいないが、この説明は他の (β) に含まれる動詞について同様に適用できるものと思われる。したがって、基本的には *thee* が命令法動詞に伴われる場合、この *thee* は目的格として解釈するのが適切であり、注意を引く動詞の場合のみ *ye* との音の類推によるのが妥当な判断であると考えられよう。

以上より、命令法動詞に後続する二人称代名詞のうち、*ye*, *thou* の場合は基本的に全て主格と判断し、*you* については主格でもあり目的格でもある (すなわち

³¹ Voges (1883: 338-55) は、再帰的与格を取った動詞の一つとして「身体的移動の動詞」 („Verba der körperlichen bewegung“) を挙げ、*come*, *fare*, *go*, *haste*, *ride*, *speed* などをその例として示している。なお古ゲルマン語においては古英語に限らず、運動動詞は再帰的与格を取った (cf. Dal and Eroms 2014: 49)。

³² 加えて、*fare thee well* を参照するよう述べてあるが、*fare* については本来的に再帰的与格を取った運動動詞である (cf. Voges 1883: 339-41) から、この記述は不適切であろう。

共通格である) と考えるのが妥当かと思われる。これは、概ね Millward (1966) の結論と同じであると言える。しかし、Millward の対象としなかった Shakespeare による数作品 (例えば *Per.* や *TNK*) のみならず、Shakespeare 以外の複数の作家の作品でも同様のことが言えるということが確認でき、Millward (1966) の議論を検証することができたと言えよう。従って、Millward の主張は初期近代英語一般に適用可能なものと思われる。

しかしながら、それぞれの作家ごとに使用の詳細な傾向は異なる可能性がある。そこで、ここからは作家ごとの傾向について見ることにしたい。各作家についての命令法動詞の後に用いられる二人称代名詞の形態ごとの用例数は、次に示す通りである。

表 14 各作家についての二人称代名詞の形態ごとの用例数

	Greene		Marlowe		Shakespeare		Jonson	
thou	37	32.46%	42	41.58%	237	27.78%	17	7.56%
ye	18	15.79%	12	11.88%	34	3.99%	4	1.78%
thee	28	24.56%	15	14.85%	193	22.63%	20	8.89%
you	31	27.19%	32	31.68%	389	45.60%	184	81.78%

Greene と Marlowe は総語数がおよそ同じであるが、命令法動詞の後に *thee* が現れるようなものが Greene で Marlowe のおよそ 2 倍程度であることを除いては、両者における二人称代名詞の分布もほぼ同じであると言ってよい。また、Greene や Marlowe と比較して Shakespeare においては、比率を比較すると *ye* の使用がやや少ない一方で *you* の使用がやや多く、*you* の主格としての使用が Shakespeare において Greene や Marlowe よりも定着していた可能性が示唆される。さて、Jonson 作品と Shakespeare 作品を比較すると、両者の分布は著しく異なる。Jonson 作品においては *thou*, *ye*, *thee* を伴うような命令法動詞が非常に少なく合計しても全体の 2 割ほどであるのに対し、*you* を伴う命令法動詞が全体の 8 割を占めている。Shakespeare 作品では *you* を伴うようなものが全体の半数弱であることに比べて、Jonson で *you* の使用が非常に多いと言える。つまり、時代が下るにつれ *you* の使用が増加するとともに *ye* の使用が減少しており、これは Mitchel (1971) の調査結果の傾向と一致するものである。

続いて、各作家についての二人称代名詞を伴う命令法動詞の分類ごとの用例数は次に示す通りである。

表 15 各作家についての命令法動詞の分類ごとの用例数

	Greene		Marlowe		Shakespeare		Jonson	
(α)	17	14.91%	14	13.86%	204	23.92%	39	17.33%
(β)	13	11.40%	5	4.95%	138	16.18%	60	26.67%
(γ)	59	51.75%	57	56.44%	379	44.43%	75	33.33%
(δ)	25	21.93%	22	21.78%	111	13.01%	35	15.56%
(ε)	0	0.00%	3	2.97%	21	2.46%	16	7.11%

動詞の分類別の作家ごとの違いはさほどないようである。特筆すべき点として、助動詞の *do* を Greene は命令法で用いていない一方で、Jonson は Shakespeare, Marlowe に比べ、多少その使用頻度が高いことが挙げられる。

その他、個別の二人称代名詞を伴う命令法動詞については、次に示すような傾向があった。

- *bring* (全 8 例), *sleep* (全 4 例) は Shakespeare のみが使用している
- *come* は 35 例中 29 例が Shakespeare によって使用されている
- *fare/farewell* (全 87 例), *say* (全 14 例) の Marlowe による使用は、一切見られない
- *fare* は 79 例中 73 例が Shakespeare による使用で *farewell* は 8 例中 6 例が Jonson による使用
- *fear* (全 14 例) は Marlowe と Shakespeare しか使用しておらず、そのうち 11 例を Shakespeare が占める
- Greene は *hark* (全 54 例) を一切使用していない一方で、類義語の *hear* (全 35 例) を 6 例使用
- *content* (全 11 例), *know* (全 12 例), *rest* (全 8 例), *stay* (全 13 例) を Jonson は一切使用していない

この中でも、とりわけ *fare/farewell* を Marlowe が、*hark* を Greene が、それぞれ一例も命令法で二人称代名詞の前において使用しておらず、*come*, *fare* の二人称代名詞が後続する命令法での使用のほとんどが Shakespeare によるものであるという点が注目し得る点と言えよう。しかし、これはあくまで各作家の文体的な問題に帰せられるものであると考えられる。

7. 考察

命令法動詞に二人称代名詞が付加されるような表現については、特にその意味解釈を巡って議論がある。本節では、先行研究における諸仮説について再考することとしたい。

まず、二人称代名詞の付加に強意の意図がないとする Poutsma (1926: 201) と、*thou* の場合に限ってではあるがそのような意図があるとする Quirk (1974: 52) の記述³³ は全く逆の立場に立っている。いずれにせよ、その根拠は特に挙げられておらず、いずれか一方がもう一方よりも説得力があるとは言えない。したがって、二人称代名詞の付加による強調の意図の有無について考えること自体が、特に意味を成すものではない可能性がある。

また、Jespersen (1949, III: 222), Yamakawa (1966: 14), Quirk (1974: 53) の主張するような、再帰的与格の付与による意味の変化は、ある程度首肯できるものである。しかし、Ando が *ye* を与格ないしは受益者格と判断している点には疑問が残る。Ando が扱った Marlowe について見ると、*ye* を命令法動詞の後で用いている例は全 12 例あり、使用されている動詞は *crouch, doubt, fear, fight, follow, get, go, hold, soar, take, taste, threaten* である。このうち、*follow, go, soar* は (α)、*crouch* は (γ)、それ以外は (δ) である。³⁴ また、*you* の場合全 32 例あり、そのうち、(α) が 3 例 (9.38%)、(β) が 5 例 (15.63%)、(γ) が 19 例 (59.38%)、(δ) が 4 例 (12.50%)、(ε) が 1 例 (3.13%) である。このうち、与格ないしは受益者格を取らない動詞は (δ)、(ε) の 5 例 (15.67%) に過ぎず、そもそも命令法動詞の後での使用数の少ない *ye* が偶然これらの区分の動詞の後に 1 例も現れなかっただけの可能性がある。したがって、やはりこの記述は不正確であると言える。

加えて Abbott の主張する、*look thee, hark thee* という表現において、命令法動詞が強意的であることによる音調上の理由から *thee* の付加がなされるとする仮説について、再考することとしたい。*lookee, harkee* という形態の存在 (Zachrisson 1919: 35, 118) から、弱形が後続すべきであったというような主張は一見正当であるように思われるが、この *-ee* は *ye* が弱化したものと考えられる。³⁵ また、*look* の後についてのみではあるが、*thou* が後続することがあったことから、こうした *thee* を弱形と見做して、命令法動詞の後に弱形が求められるべきであるとする主

³³ OED も同様に *look you/ye/thee* や *mark you* での二人称代名詞の付加は強意的であるとする主張を行っている (OED, *look*, v., I. 9. c.; *mark*, v., III. 27. b.)。

³⁴ 言い換えれば、(α) が 4 例 (33.33%)、(γ) が 8 例 (66.66%) である。

³⁵ Franz (1892: 216) は *harkee, lookee* について、*you* が弱化したのでなければ *ye* が保存されていると述べている。

張は納得し難い。さらに、*mark you* という後代しばしば用いられた形式は **markee* とはならなかった点からも、この主張は留保すべきであろう。あるいは、主格補語の人称代名詞の目的格の使用に強勢が理由として挙げられることがある³⁶ が、その一方で命令法に伴われる二人称代名詞に関しては目的格の使用に弱勢が挙げられるのは矛盾がある。さらに、*look, hark* という動詞にのみこの仮説を唱えることの正当性について、Abbott は特に説明を加えていない。また、*thee* を弱形とするならば *thou* が強形となり、*look, hark* という命令法動詞の後には *thou* が現れなくとも良いはずである。しかしながら、実際のところ *hark thou* という形式は見られないが、*look thou* という形式は複数見られる。³⁷ その上、命令法動詞に伴われる *thee* は、前節において既に述べたように、再帰的な与格ないしは間接目的語として解釈され得るものばかりである。以上より、この Abbott の主張は不適切であると言わざるを得ない。

次に、Millward (1966: 301) の主張するような、命令法動詞への *you/thou* の付加について Shakespeare が方言話者や外国人などの特定の社会的属性の話者のマーカ―としたのかという点について再考する。次に示す例のように、Shakespeare の歴史劇でイングランドの上流階級に属する登場人物の発話においても、*you/thou* を伴う命令法動詞が用いられている例が見られる。

- (5) a. [King Richard III] **Go you** before, and I will follow you.
(R3 F1: Sig. q5r)
- b. [Duke of Suffolk] Farwell sweet Madam: but **hearke you** Margaret,
No Princely commendations to my King?
(IH6 F1: Sig. 16v)
- c. [King Richard II] **Go thou** and fill another roome in hell.
(R2 F1: Sig. d5r)
- d. [Bishop of Winchester] Nay, **stand thou** back, I will not budge a foot:
(IH6 F1: Sig. k4r)

また、そもそも Millward はそのような社会的属性の人物による発話が、*you/thou* が付加されていない命令法動詞の用例と、付加されていない命令法動詞の用例のうち、どの程度の割合を占めているかなどといったことは言及しておらず、根拠

³⁶ Cf. Inoue (2019: 13-4).

³⁷ 同じく注意を引く動詞である *hear, mark* についても、命令法で *thou* を伴って用いられている。

に乏しいものであると言わざるを得ない。従って、この Millward の主張に対してもいささか懐疑的にならざるを得ない。

8. おわりに

本稿では、Marlowe, Greene, Shakespeare, Jonson の全戯曲の初期の刊本をコーパスとし、命令法動詞の後に二人称代名詞が用いられるような形式について調査を行った。本稿の調査の結果、Millward (1966) の主張した、*thee* が伴われる場合は命令法動詞が運動動詞、注意を引くための動詞、再帰的与格ないしは間接目的語を取る動詞のいずれかであることが、調査対象を拡大してもなお正しいことが確認された。つまり、命令法動詞の後に二人称代名詞が伴われる諸形式は、一見類似するもののようであるが、*thou/thee* については初期近代英語期においても *ur* 格の区別が基本的に保存されていたことが改めて証明されたこととなる。また、各作家ごとに二人称代名詞を命令法で伴って使用する動詞に、その作家の文体に基づくと考えられるような差異があることがわかった。さらに、先行研究で主張されたような諸仮説の一部は、根拠に乏しいと言わざるを得ず、今回の調査によって見つかった反例によって、その主張が妥当でないことが明らかになった。加えて、本稿の調査によって、作家ごとの使用する動詞の違いといった文体的特徴が明らかになったが、このことは例えば *authorship* の問題などに寄与することができるものであると言えるだろう。

略号一覧

1. 作品名略号

<i>Ado</i>	<i>Much Ado About Nothing</i>	<i>H8</i>	<i>King Henry VIII</i>
<i>Alch.</i>	<i>The Alchemist</i>	<i>Ham.</i>	<i>Hamlet, Prince of Denmark</i>
<i>Alph.</i>	<i>Alphonsus, King of Arragon</i>	<i>Inn</i>	<i>The New Inn, or The Light Heart</i>
<i>Ant.</i>	<i>Anthony and Cleopatra</i>		
<i>AWW</i>	<i>All's Well That Ends Well</i>	<i>Jam4</i>	<i>James IV</i>
<i>AYL</i>	<i>As You Like It</i>	<i>JC</i>	<i>Julius Cæsar</i>
<i>Case</i>	<i>Case is Altered</i>	<i>JM</i>	<i>The Jew of Malta</i>
<i>Cat.</i>	<i>Catiline His Conspiracy</i>	<i>John</i>	<i>King John</i>
<i>Cor.</i>	<i>Coriolanus</i>	<i>Lear</i>	<i>King Lear</i>
<i>CR</i>	<i>Cynthia's Revel, or The Fountain of Self-Love</i>	<i>LGLE</i>	<i>A Looking-glass for London and England</i>
<i>Cym.</i>	<i>Cymbeline</i>	<i>LLL</i>	<i>Love's Labour's Lost</i>
<i>DA</i>	<i>The Devil is an Ass</i>	<i>Mac.</i>	<i>Macbeth</i>
<i>Dido</i>	<i>Dido, Queen of Carthage</i>	<i>ML</i>	<i>Magnetic Lady, or Humours Reconciled</i>
<i>DrF.</i>	<i>Doctor Faustus</i>	<i>MM</i>	<i>Measure for Measure</i>
<i>Edw2</i>	<i>King Edward II</i>	<i>MND</i>	<i>A Midsummer Night's Dream</i>
<i>Edw3</i>	<i>King Edward III</i>	<i>Mort.</i>	<i>Mortimer His Fall</i>
<i>EH</i>	<i>Eastward Hoe</i>	<i>MP</i>	<i>Massacre at Paris</i>
<i>EMI</i>	<i>Every Man in His Humour</i>	<i>MV</i>	<i>The Merchant of Venice</i>
<i>EMO</i>	<i>Every Man out of His Humour</i>	<i>OF</i>	<i>Orlando Furioso</i>
<i>Epic.</i>	<i>Epicoene, or the Silent Woman</i>	<i>Oth.</i>	<i>Othello, the Moor of Venice</i>
<i>Err.</i>	<i>The Comedy of Errors</i>	<i>Per.</i>	<i>Pericles, Prince of Tyre</i>
<i>Fair</i>	<i>Fairolomew Fair</i>	<i>Poet.</i>	<i>The Poetaster</i>
<i>FBFB</i>	<i>Friar Bacon and Friar Bungay</i>	<i>R2</i>	<i>King Richard II</i>
<i>GaG</i>	<i>George a Greene, the Pinner of Wakefield</i>	<i>R3</i>	<i>King Richard III</i>
<i>1H4</i>	<i>King Henry IV, First Part</i>	<i>Rom.</i>	<i>Romeo and Juliet</i>
<i>2H4</i>	<i>King Henry IV, Second Part</i>	<i>Sej.</i>	<i>Sejanus His Fall</i>
<i>H5</i>	<i>King Henry V</i>	<i>Seli.</i>	<i>Selimus</i>
<i>1H6</i>	<i>King Henry VI, First Part</i>	<i>Shep.</i>	<i>Sad Shepherd</i>
<i>2H6</i>	<i>King Henry VI, Second Part</i>	<i>Shr.</i>	<i>The Taming of the Shrew</i>
<i>3H6</i>	<i>King Henry VI, Third Part</i>	<i>SN</i>	<i>The Staple of News</i>

<i>1Tamb. Tamburlaine the Great, Part One</i>	<i>TN Twelfth Night, or What You Will</i>
<i>2Tamb. Tamburlaine the Great, Part Two</i>	<i>TNK The Two Noble Kinsmen</i>
<i>Temp. The Tempest</i>	<i>Tro. Troilus and Cressida</i>
<i>TGV The Two Gentlemen of Verona</i>	<i>Tub A Tale of Tub</i>
<i>Tim. Timon of Athens</i>	<i>Volp. Volpone, or the Fox</i>
<i>Tit. Titus Andronicus</i>	<i>Wiv. The Merry Wives of Windsor</i>
	<i>WT The Winter's Tale</i>

2. その他略号

J. F1 Jonson's First Folio (or 1616 Folio)

Sh. F1 Shakespeare's First Folio

参考文献

- Abott, E. A. 1870. *A Shakespearian Grammar: An Attempt to Illustrate Some of the Difference between Elizabethan and Modern English (3rd ed.)*. New York: Dover Publications, Inc., 2003.
- Anthony, Lawrence. 2020. AntConc (Version 3.5.9) [Computer software]. Tokyo: Waseda University. (<https://www.laurenceanthony.net/software/antconc/>)
- Barber, Charles. 1997. *Early Modern English*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Blake, Norman Francis. 2002. *A Grammar of Shakespeare's Language*. New York: Palgrave.
- Bowers, Fredson (ed.) 1987. *Dictionary of Literary Biography, Vol. 62: Elizabethan Dramatists*. Detroit: Gale Research. From Gale Literature Resource Center: (<https://go.gale.com/ps/dispBasicSearch.do?prodId=LitRC>)
- Brooke, C. F. Tucker (ed.) 1910. *Works of Christopher Marlowe*. Oxford: Clarendon Press.
- Brunner, Karl. 1962. *Die englische Sprache: ihre geschichtliche Entwicklung, 2. Bd.: Die Flexionsformen und ihre Verwendung, 2. überarbeitete Aufl.* Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Chambers, E. K. 1930. *William Shakespeare: A Study of Facts and Problems, Vol. 1*. Oxford: Clarendon Press.
- Dal, Ingerid, and Hans-Werner Eroms. 2014. *Kurze Deutsche Syntax auf Historischer Grundlage, 4. Aufl.* Berlin and Boston: Walter de Gruyter.

- Deutschbein, Karl. 1897. *Shakespeare-Grammatik für Deutsche: Übersicht über die grammatischen Abweichungen vom heutigen Sprachgebrauch bei Shakespeare*, 2., verbesserte Aufl. Cöthen: Verlag von Otto Schulze.
- Franz, Wilhelm. 1892. Zur Syntax des älteren Neuenglisch: Das Pronomen. *Englische Studien: Organ für englische Philologie* 17: 200-25.
- Franz, Wilhelm. 1986. *Die Sprache Shakespeares in Vers und Prosa, unter Berücksichtigung des Amerikanischen entwicklungsgeschichtlich dargestellt: „Shakespeare-Grammatik“*, unveränderter Nachdruck der 4., überarbeiteten und wesentlich erweiteren Auflage von 1939. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Greg, W. W. 1962a. *A Bibliography of the English Printed Drama to the Restoration, Vol. I: Stationers' Records Plays to 1616: Nos. 1-349*. London: The Bibliographical Society.
- Greg, W. W. 1962b. *A Bibliography of the English Printed Drama to the Restoration, Vol. II: Plays 1617-1689: Nos. 350-836, Latin Plays, Lost Plays*. London: The Bibliographical Society.
- Hentschel, Elke and Herald Weydt. 2013. *Handbuch der deutschen Grammatik*, 4., vollständig überarbeitete Aufl. Berlin and Boston: Walter de Gruyter.
- Hope, Jonathan. 2003. *Shakespeare's Grammar*. London: The Arden Shakespeare.
- Inoue, Shun. 2019. *It is me versus it is I: A Critical Analysis of the Case-Choice of the Subject Complements in Non-Cleft Sentences in Present-day English*. *Cornucopia* 29: 1-28.
- Jespersen, Otto. 1949. *Modern English Grammar on Historical Principles, 7 Vols*. London: George Allen & Unwin
- Levin, Beth. 1993. *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- Millward, Celia. 1966. Pronominal Case in Shakespearean Imperatives. In Vivian Salmon, and Edwina Burness (eds.), *A Reader in the Language of Shakespearean Drama*, 301-8. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, 1987.
- Mitchel, Eleanor Rettig. 1971. *Pronouns of Address in English, 1580-1780: A Study of Form Changes as Reflected in British Drama*. Ph.D. Dissertation, Texas A&M University.
- Muir, Kenneth. 1977. *The Sources of Shakespeare's Plays*. London: Methuen.
- Nevalainen, Terttu, and Helena Raumolin-Brunberg. 1996. Social Stratification in Tudor

- English? In Derek Britton (ed.), *English Historical Linguistics 1994: Papers from the 8th International Conference on English Historical Linguistics*, 303-326. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Pollard, Alfred William. 1909. *Shakespeare Folios and Quartos: A Study in The Bibliography of Shakespeare's Plays, 1594-1685*. London: Methuen.
- Poutsma, H. 1926. *A Grammar of Late Modern English for the Use of Continental, Especially Dutch, Students, Part II: The Parts of Speech, Section II: The Verb and the Particles*. Groningen: P. Noordhoff.
- Proudfoot, Richard, Ann Thompson, David Scott Kastan, and H. R. Woudhuysen (eds.). 2021. *The Arden Shakespeare Third Series Complete Works*. London: The Arden Shakespeare.
- Quirk, Randolph. 1974. Shakespeare and the English Language. In Vivian Salmon, and Edwina Burness (eds.), *A Reader in the Language of Shakespearean Drama*, 3-21. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Rissanen, Matti. 1999. Syntax. In Roger Lass (ed.), *The Cambridge History of the English Language, Vol.III, 1476-1776*, 187-326. Cambridge: Cambridge University Press.
- Spies, Heinrich. 1897. *Studien zur Geschichte des englischen Pronomens im XV. und XVI. Jahrhundert (Flexionslehre und Syntax)*. Halle (Saale): Max Niemeyer Verlag.
- Ukaji, Masatomo. 1978. *Imperative Sentences in Early Modern English*. Tokyo: Kaitakusha.
- Visser, F. Th. 1970. *An Historical Syntax of the English Language, Part I, Syntactical Units with One Verb (2nd impression with corrections)*. Leiden: E. J. Brill.
- Voges, F. 1883. Der Reflexive Dativ im Englischen. *Anglia* 6: 317-74.
- Yamakawa, Kikuo. 1966. The Imperative Accompanied by the Second Person Pronoun. *Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences* 7(1): 6-25.
- Zachrisson, R. E. 1919. *Engelska Sstilarter med Textprov*. Stockholm: A. V. Carlsons förlag.

辞書

- Crystal, David, and Ben Crystal. 2002. *Shakespeare's Words: A Glossary & Language Companion*, with a Preface by Stanley Wells. London: Penguin Books.
- Crystal, David, and Ben Crystal. 2018-. *Shakespeare's Words*. From

<https://www.shakespeareswords.com/>

The Online Middle English Dictionary. Ann Arbor: University of Michigan Library.

<https://quod.lib.umich.edu/m/middle-english-dictionary/dictionary> [MED]

Onions, C. T. 1988. *A Shakespeare Glossary*, enlarged and revised throughout out by Robert D. Eagleson. Oxford: Clarendon Press.

The Oxford English Dictionary Online. Oxford: Oxford University Press.

<https://www.oed.com/> [OED]

Schmidt, Alexander. 1971. *Shakespeare-Lexicon: A Complete Dictionary of All the English Words, Phrases and Constructions in the Works of the Poet*, 2 Vols., revised and enlarged by Gregor Sarrazin, 6th ed. Berlin/New York: Walter de Gruyter.

コーパス

Greene, Robert. 1594a. *The honorable historie of frier Bacon, and frier Bongay As it was plaid by her Maiesties seruants. Made by Robert Greene Master of Arts*. London: Printed [by Adam Islip] for Edward White, and are to be sold at his shop, at the little north dore of Poules, at the signe of the Gun. From Early English Books Online: <https://search.proquest.com/eebo/docview/2264183671/> [FBFB Q1]

Greene, Robert. 1594b. *The historie of Orlando Furioso, one of the twelue pieres of France As it was plaid before the Queenes Maiestie*. London: Printed by Iohn Danter for Cuthbert Burbie, and are to be sold at his shop nere the Royall Exchange. From Early English Books Online: <https://search.proquest.com/eebo/docview/2240873696/99841691/> [OF Q1]

Greene, Robert. 1594c. *A looking glasse for London and England. Made by Thomas Lodge Gentleman, and Robert Greene. In Artibus Magister*. London: Printed by Thomas Creede, and are to be sold by William Barley, at his shop in Gratiouse streete. From Early English Books Online: <https://search.proquest.com/eebo/docview/2240879874/99845225/> [LGLE Q1]

Greene, Robert. 1598. *The Scottish historie of Iames the fourth, slaine at Flodden Entermixed with a pleasant comedie, presented by Oboram King of Fayeries: as it hath bene sundrie times publikely plaide. Written by Robert Greene, Maister of Arts*. London: Printed by Thomas Creede. From Early English Books Online: <https://search.proquest.com/eebo/docview/2240892358/99841536/> [Jam4 Q1]

- Greene, Robert. 1599a. *The comicall historie of Alphonsus, King of Aragon As it hath bene sundrie times acted. Made by R.G.* London: Brinted by Thomas Creede.
From Early English Books Online:
<https://search.proquest.com/eebo/docview/2240917682/> [Alph. Q1]
- Greene, Robert. 1599b. *A pleasant conceyted comedie of George a Greene, the pinner of Wakefield As it was sundry times acted by the seruants of the right Honourable the Earle of Sussex.* London: By Simon Stafford, for Cuthbert Burby: and are to be sold at his shop neere the Royall Exchange. From Early English Books Online: <https://search.proquest.com/eebo/docview/2240854653/> [GaG Q1]
- Greene, Robert. 1909. *The Tragical Reign of Selimus, 1594.* London: Printed for the Malone Society by C. Whittingham at the Chiswick Press. [Sel. Q1]
- Jonson, Ben. 1605a. *Eastward hoe As it was playd in the Black-friers. By the Children of her Maiesties Reuels.* London: Printed for William Aspley. From Early English Books Online: <https://search.proquest.com/eebo/docview/2248560020/> [EH Q1]
- Jonson, Ben. 1609. *Ben Ionson, his Case is alterd As it hath beene sundry times acted by the children of the Blacke-friers.* London: Printed [by Nicholas Okes] for Bartholomew Sutton, dwelling in Paules Church-yard neere the great north doore of Paules Church. From Early English Books Online:
<https://search.proquest.com/eebo/docview/2240894542/> [Case Q1]
- Jonson, Ben. 1616. *The workes of Benjamin Ionson.* London: Printed by W: Stansby, and are to be sould by Rich: Meighen. From Early English Books Online:
<https://search.proquest.com/eebo/docview/2240922515/> [J. F1]
- Jonson, Ben. 1631. *The nevv inne. Or, The light heart A comoedy. As it was neuer acted, but most negligently play'd, by some, the Kings Seruants. And more squeamishly beheld, and censured by others, the Kings subiects. 1629. Now, at last, set at liberty to the readers, his Maties seruants, and subiects, to be iudg'd. 1631. By the author, B. Ionson.* London: Printed by Thomas Harper, for Thomas Alchorne, and are to be sold at his shop in Pauls Church-yard, at the signe of the greene Dragon. From Early English Books Online:
<https://search.proquest.com/eebo/docview/2240870370/> [Inn Q1]
- Jonson, Ben. 1640. *The vvorkes of Benjamin Ionson. Containing these playes, viz. 1 Fairolomew Fayre. 2 The staple of newes. 3 The Divell is an asse.* London: Printed [by John Beale, James Dawson, Bernard Alsop and Thomas Fawcet] for

- Richard Meighen [and Thomas Walkley]. From Early English Books Online:
<https://search.proquest.com/eebo/docview/2264206645/> [J. F2]
- Marlowe, Christopher. 1590. *Tamburlaine the Great Who, from a Scythian shepherde, by his rare and woonderfull conquests, became a most puissant and mightye monarque. And (for his tyranny, and terrour in warre) was tearmed, the scourge of God. Deuided into two tragicall discourses, as they were sundrie times shewed vpon stages in the citie of London. By the right honorable the Lord Admyrall, his seruantes.* London: Printed by Richard Ihones: at the signe of the Rose and Crowne neere Holborne Bridge. From Early English Books Online:
<https://www.proquest.com/eebo/docview/2240880014/> [1Tamb. & 2Tamb. O1]
- Marlowe, Christopher. 1594a. *The troublesome raigne and lamentable death of Edward the second, King of England with the tragicall fall of proud Mortimer: as it was sundrie times publiquely acted in the honourable citie of London, by the right honourable the Earle of Pembrooke his seruants. Written by Chri. Marlow Gent.* London: [By R. Robinson] for William Iones dwelling neere Holbourne conduit, at the signe of the Gunne. From Early English Books Online:
<https://search.proquest.com/docview/2240894579/> [Edw2 Q1]
- Marlowe, Christopher. 1594b. *The tragedie of Dido Queene of Carthage played by the Children of her Maiesties Chappell. Written by Christopher Marlowe, and Thomas Nash. Gent.* London: Printed, by the widdowe Orwin, for Thomas Woodcocke, and are to be solde at his shop, in Paules Church-yard, at the signe of the blacke Beare. From Early English Books Online:
<https://www.proquest.com/eebo/docview/2240882023/> [Dido Q1]
- Marlowe, Christopher. 1616. *The tragicall history of the life and death of Doctor Faustus. Written by Ch. Marklin.* London: Printed for Iohn Wright, and are to be sold at his shop without Newgate, at the signe of the Bible. From Early English Books Online: <https://search.proquest.com/eebo/docview/2240884184/> [DrF. B1]
- Marlowe, Christopher. 1633. *The famous tragedie of the rich Ievv of Malta As it vvas playd before the King and Queene, in his Majesties theatre at White-hall, by her Majesties Servants at the Cock-pit. Written by Christopher Marlo.* London: Printed by I[ohn] B[eale] for Nicholas Vavasour, and are to be sold at his shop in the Inner-Temple, neere the Church. From Early English Books Online:
<https://www.proquest.com/eebo/docview/2240853050/> [JM Q1]

Marlowe, Christopher. n.d. *The massacre at Paris with the death of the Duke of Guise. As it was plaide by the right honourable the Lord high Admirall his Seruants. Written by Christopher Marlow.* London: Printed by E[dward] A[l]lde] for Edward White, dwelling neere the little north doore of S. Paules Church, at the signe of the Gun. From Early English Books Online:

<https://www.proquest.com/eebo/docview/2240863155/> [MP Q1]

Shakespeare, William. 1596. *The raigne of King Edvvard the third as it hath bin sundrie times plaied about the citie of London.* London: Printed [by T. Scarlet] for Cuthbert Burby. From Early English Books Online:

<https://search.proquest.com/eebo/docview/2240868417/99842015/> [Edw3 Q1]

Shakespeare, William. 1609b. *The late, and much admired play, called Pericles, Prince of Tyre With the true relation of the whole historie, aduentures, and fortunes of the said prince: as also, the no lesse strange, and worthy accidents, in the birth and life, of his daughter Mariana. As it hath been diuers and sundry times acted by his Maiesties Seruants, at the Globe on the Banck-side. By William Shakespeare.* London: [By William White and Thomas Creede] for Henry Gosson, and are to be sold at the signe of the Sunne in Pater-noster row, &c. From Early English Books Online:

<https://search.proquest.com/eebo/docview/2248523855/99846589/> [Per. Q1]

Shakespeare, William. 1623. *Mr. VVilliam Shakespeares Comedies, Histories, & Tragedies; Published According to the True Originall Copies.* London: Isaac Iaggard, and Ed. Blount. From Early English Books Online:

<https://search.proquest.com/docview/2240890297> [Sh. F1]

Shakespeare, William, and John Fletcher. 1634. *The two noble kinsmen presented at the Blackfriars by the Kings Maiesties servants, with great applause: written by the memorable worthies of their time; Mr. Iohn Fletcher, and Mr. William Shakspeare. Gent.* London: By Tho. Cotes, for Iohn Waterson: and are to be sold at the signe of the Crowne in Pauls Church-yard. From Early English Books Online:

<https://search.proquest.com/eebo/docview/2240934949/99842001/> [TNK Q1]

**On the Postposed Second Person Pronouns
in the Imperative Construction in Early Modern English:
With Special Reference to Elizabethan Drama**

Shun Inoue

It is a well-known fact that second personal pronouns such as *ye*, *you*, *thou*, and *thee* can follow the imperative verbs in Early Modern English. Although there have been some studies concerning this usage, including corpus-based ones mainly treating the use by William Shakespeare, no quantitative and comprehensive research that deal with the use by other playwrights in his contemporary era has been conducted.

This paper examines the use of the second person pronouns after the imperative verbs using corpora which comprise of the early editions of all the dramatic works by four playwrights, namely Robert Greene, Christopher Marlowe, William Shakespeare, and Ben Jonson. The current study clarifies individual stylistic tendency of each playwright regarding the use of the imperatives accompanied by the second person pronouns.